

私の好きな人

自民党政調会内閣部会長時代の年頭エッセイ。
「私の好きな人」という課題を与えられて、汪精衛政権の陳群内政部長の誌した「共存共亡」(共に生き共に死ぬこと)のできる人こそが、私の好きな人と説く。

政治にとつても、宗教にとつても、将又学問や芸術にとつても、人間というものが、最初のテーマであり、同時に最後のテーマになっている。究め尽そうと思つても、究め尽すことができないのが人間であり、又そうであるが故に人生というものに尽きぬ醍醐味があるといつものであろう。

絵画が美しいとか景色が絶佳であるとか音楽が絶妙であるとか言つても、人間に及ぶものはない。人間というものは、たしかに神の傑作であり神の一人子を賜う程の愛惜の情を神が人間に対してお持ちになられたのも故なしとしない。

そこで、私の好きな人であるが、凡ての人が神の傑作であるとするれば、その中で好き嫌いとかより好みをする事は、我儘であるとも言えようものだ。同時に唯神は又同時に好悪の感情の行使の自由をも、人間に許しておられる以上、私の好きな人ということを取て表明しても、大きい罪悪とは謂えなからう。

今静かに瞑目して私の脳裏をかすめる人間群像を追い求めてみる。そのうち一体誰が、私の好きな人のカテゴリーにはいるかと考えてみる。ところが顔形が違っているように、夫々の特長があつて、どの人も捨て難い味わいがある。その中でどの人が一番好きかと謂われても、にわかには断定する事ができないうらみがある。

川奈のゴルフ場はたしかにいい。しかし真夏には軽井沢や那須の方が川奈のそれよりもよい。その様に仕事の相談相手によい人でも確かに人生を語るにふさわしくない人もある。共に楽しむ友としてこよない相手も、逆境の味方としては物足りない場合もないとは言えない。遠くから眺めて敬慕している人でも、親しく交つてみて満たされぬものを感じる人もある。

このように見ると、私の好きな人などという設題に的確に答える事は、なかなかむづかしいことである。否不可能に近いと嘆ずるより他にないとも言えよう。しかしそれかと言って、全然答えられぬ問題というものはあり得ない。問題が問題となる以上は、必ず答が予定されているというのが、ギリシヤの昔から論理学の大前提になつてゐる筈ではないか。

再び瞑目して答を求めてみる。そこで私に思い出されるのは私の恩師の話である。その私の恩師は今物故されているが、戦時中中国に遊んで汪精衛政権の内政部長陳群氏に会われた。話がすんで先生は陳群氏に一筆お願いしたところ、氏はスラスラと「共存共亡」と書きしるしてこれを私の恩師に渡された。

「共存」と言えば必ず人はその次に、「共栄」を連想するのを常とする。ところが陳群氏は、その代りに「共亡」を以つてされた。恩師は恐れ入つて静かにその含蓄を味い直してみたのである。

当時日本は自らの工作によつてつくり上げた汪政権の力の限界を見極めて、重慶工作も展開してい

た。陳氏は、「人間というものは誰しも共存する以上は共栄を願望するものである。これは人情の自然であり、特にこれをほめ称える必要もないことである。しかるにわれわれはルビコン河を渡ってしまった貴方の国と共亡するも敢て悔いしない決意で、新生東亜の未来のために闘っているのに、そのわれわれのつきつめた決意を外にして、あられもなく重慶工作をやられるというのはどうしたことか」というプロテストを、この四字の背後にこめられているのだと気がついた瞬間、恩師は冷水を浴びせられたような気持ちをしたと洩らされたことがある。

共存と共栄の段階でお互いに交際ができる人は多い。しかし共存と共亡という段階で、共に慰め、共に励まし、共に生き、共に死ぬることができる人、そういう人が、本当に私の好きな人だろうと思う。

夏目漱石の『虞美人草』の最終のくだりに喜劇と悲劇との明快な解明がある。そこで漱石のいう喜劇の世界における友は必ずしも悲劇の段階における友となり得るものではない。私は、その悲劇をも共に出来る人、そういう好きな人に巡り合いたいし、自らも、亦その人のために悲劇の支えとなり得るように精進しなければならぬと心に期している。

平 常 心

津島大蔵大臣時代に、秘書官として仕えた大平はこの郷里の先輩を「平常心の人」と追慕しつつ、平常心の大切さを後輩に論じている。『硯滴』に初出。

二月七日午後六時三十分、津島寿一先生は七十九年に及ぶ多彩な生涯を静かに閉じられた。その日の朝、先生は側近の方に「今日はいよいよ往生の日である。下二番町の宅には、親類縁者の者はもう集っておるかね」と淡々と語られ、午後三時頃から病氣との最後のたたかいをたたかわれ、夕刻、静かに大往生をとげられた。

故人の遺言により、葬儀は近親その他少数の関係者によって極めて簡素に営まれた。豊前には勲一等旭日大綬章の勲記、天皇陛下より賜った祭祀料、皇太子同妃両殿下から賜った菓子、津島・堀越両家、友人一同、門弟一同の生花のみが飾られてあった。

二月九日、これまた簡素な密葬があり、十三日の初七日には先生にゆかりの深かった大蔵省、日本銀行、塩業組合中央会、百十四銀行、日本体育協会、日本交通安全協会、日本棋院、東邦モーターズ等の主催にかかる追悼法会が、築地の西本願寺で行われた。その席上、先生の旧友君島一郎氏は、友

人を代表して、明治三十八年先生と旧制第一高等学校の寄宿舎での出会い以来の思い出を切々と故人に語りかけられた。その中で君島氏は、津島先生の人となりをも「平常心の人」として欽慕された。先生は学生時代から試験勉強というものを一切やらなかった。大方の学生は日頃の怠慢を補うために、試験が近付くといわゆる「猛勉強」をやるのが常であるが、先生には一切それがなかった。試験が近付いても、悠揚迫らず通常の日と何の変わりもない日常を過され、観劇もやればスポーツもたのしまれた。しかも成績は常に抜群であった。

先生は社会に出られてからも、大事に臨まれて決して狼狽動揺されることなく、常に泰然として心の平衡を以てこれに当られた。また些事をも決してないがしろにされることなく、行き届いた親切心を以て処理された。柔和な微笑を以て大事をたのしまれる半面、周到な誠を以て小事を愛されたのである。目黒に閉居されていた当時、御自分の家をみずから「目黒工藝社」と命名され、仏壇や屏風をはじめとしてスタンドや本箱の類に至るまで、御自分で製作された。その作品のもつ雅致は、今尚私共の心をうつものがある。生前非売品ながら世に問われた十六巻に及ぶ『芳塘随想』には、生母に対する限りなき敬慕の情をはじめとして、内外にわたる恩師、先輩、友人に対するこまやかな敬愛の情が真率に吐露されておる。

津島先生にとつての一日一日は、美しい一日一日であり、この一日一日を傑作にしようとするポイエシステックな工夫がにじみ出ている。その間を縫って心の平衡という縦糸と真実という緯糸が走っていた。そこには英雄気取りの思い上がりも、秀才ぶった虚飾もみられない、本当に人間として望み得る限りの清く美しい、しかも充実した七十九年の生涯であられた。そして平常心こそは人生にとつての最大の宝であることを身を以て実証されたのである。

故池田勇人首相は、よく私に「山よりでかい獣は出ないよ」といわれた。どんなに大事でも、それが問題になる以上解決の道があるものだという道意を伝えたものであろう。われわれは大事に臨めば臨むほど、困難が大きければ大きいほど、道がいかにけわしくとも、平常心を失ってはいけないばかりか、この平常心だけが、われわれに解決の道を切り開いてくれるものであることを心に銘すべきである。同時にそれがいかに小事であっても、その中には全宇宙を貫く真理の一滴が秘められておるからには、これをないがしろにすべきものでは決してない。ライオンさえも、小さい兎を倒すためにその全力をあげるものであることを同時に思い起すべきである。

故人を追慕しつつ春寒いよいよ身心に迫るを覚える。

池田さんの潔癖

池田内閣の外務大臣を辞任して自民党筆頭幹事長に就任した当時、池田前首相の三回忌を前に、その人間像を描出したもの。『硯滴』に初出。

池田（勇人）さんは私にとってあまりにも近い人であった。それだけに「池田さんの人間像」を描いてみようと考えて見ても、どの面を捉えて書いたらよいかその座標のとり方に先ず困ってしまつ。仕方がないからあまり世間に知られていない池田さんの一面に、レンズを向けてみることにする。

池田さんは人に対し好悪の情がはっきりしすぎる位にはっきりしていた人だった。いったん嫌悪の情を覚えるとそれからの脱却は容易でなかった。反対に好感をもった人には、必要以上ともいえるほどに親切で自己解放的であった。私なども好感をもってもらっていたと見えて、分相応以上に恩顧を受け得たのではないかと思う。

この好悪の情は他人許りでなく、極めて身近な人々にも同様に発露されていたようだ。帰宅されて夫人が見えないとその行先を馬鹿に気にしてみたり、お嬢さんの結婚についても理屈では手放さなければならぬことを知りつつ、実際は手放すのがいやさに色々文句をつけたものである。揚句の果ては、世話する人とか相手のお嬢さんを敵視するようになったりする。

「清濁併せ呑む」等という芸当は池田さんにはできなかった。他者との接触において潔癖性というアレルギー病をもっていたようだ。その潔癖性は金の取扱いにもよく出ておった。この献金のもつ鮮度に大変神経質であつた。その金が政治的効用をもつものであれば多少の無理をしても受取るというようなことはなかつた。何を措いても先ず第一にその鮮度を問題にしたものである。

その傾向は政策に対する態度にも貫かれていた。例えば日本の税制は、どの部分をとつてみても、多かれ少なかれ池田さんの苦吟を経たものであるといえよう。その中には一貫して税の公平という教条主義が貫かれておる。私はこの教条主義には少なからぬ抵抗を感じてきたものだが、この城砦を守る殿將として、池田さんは大いに奮闘したものである。また自由企業体制を信条としつつも政府の手によって或種の方向づけや計画性を盛り込むことに意外に熱心であつた。これも時の流れに任せようとする観照的な没我的な態度にあきたらない、潔癖性の致すところであつたのではなからうか。

晩年、殊に政権をあくまでかつかつてからの池田さんにはこの潔癖性からの脱却を色々と工夫しておられたようだが、途中半ばで逝かれたことは、返すがえすも残念である。

高橋是清翁と農民

高橋蔵相の陳情農民に対する態度をエピソードとして描きながら、自ら政治家として多くの陳情者にどのように対処すべきかを自戒している。

かつて高橋是清蔵相の秘書官をしておられた久保文蔵さん　今はすでに故人である　が、私に次のような思い出を話されたことがある。

昭和の初期、農村が恐慌に見舞われて農村匡救事業の施行がやかましく叫ばれた時のことである。連日のように多くの陳情者が東京に押し寄せてきた。御多聞に洩れず、大蔵大臣室にもそれらの人々が殺到してくる始末であった。大臣が一人一人にお目にかかるといっても、到底、時間や体力の余裕がない。久保秘書官はどうしたものだろうと思案の揚句、高橋蔵相にお伺いを立てて見ることにした。高橋さんは「それではこうし給え。その人達の内、シューノウのような手をした人は自分が直接会う。白い手をした人は君が処理することにしては」と言われそのまま実行された。高橋さんは大きいシューノウのような手をした本当の農民とは時間の移るのも頓着しないで話し込まれたそうである。

もう一つ高橋是清翁の話であるが、先日賀屋興宣氏（高橋蔵相の下に主計局長をつとめられた人）から伺ったことである。

これも農村が深刻な不況に見舞われたその頃のことであるが、国会の予算委員会で政友会の猛者連が、農村匡救対策を携えて、高橋蔵相を追及していた。その頃、高橋さんの手許には毎日のように多くの手紙が農民から直接届いていた。長い質問をじつと聞かれていた高橋さんは、答弁席に立って、その中の一つの手紙を読み上げかけた。その手紙は長文のものであったので、途中で質問者が「もうその手紙を読んでいただくなくてもよい。私の質問に答えてもらいたい」と大臣の朗読をさえぎった。これに対し高橋さんは、「貴方の質問よりは、この一通の手紙の方が余程真実をついておるし、私の胸を打つものがある」といって又朗読を続けられた。たまりかねた質問者が、「大臣は天下の選良の意見よりも一百姓の手紙を尊重するのか。もうこれ以上朗読はやめてもらいたい」と再度、蔵相の朗読をさえぎった。

高橋さんは、「この手紙は、随分長文の手紙であるが、どうしてもやめると仰せられるのであれば、残念ですがこれで中止することにいたします」といわれて席に帰られた。賀屋主計局長は、大臣席の隣に席をしめておったが、後ろから原稿を見ておって、大臣はすでにその手紙を朗読し終えておられていたので、事実はこれ以上朗読を続けることはできなかったのだが、そこを残念ながらこれで打ち切りにしましょうと結んだところは、さすがだと思ったということであった。

七月には米価の改訂期がまいり、多くの陳情者が東京に押し寄せてこられることであらう。大きいジューノウ（十能）のような手をされた人もおれば白い手をされた人もいないとはいえないと思う。それにつけても思い出すのは高橋是清翁のことである。

* ジューノウ（十能）

（昭、四一・五・二二）

黙して変通

高松高商の二年先輩で、東京商大では同期となつた梅野氏（平成七年死去）とのユニークな交遊を描く。大平の人間観がうかがえる。

私の友人の一人に梅野典平という人物がいる。福島県のいわき市（旧平市）に居住している。時折墨で描いた戯画のようなものに一言二言、激励とも皮肉ともつかぬ文をそえて送ってくる。テレビに出ている私を見て、きょうのネクタイがよいとか、貧乏ゆすりはいけないとか書いてくる。たまに上京した時は、たいてい拙宅に泊まってくれる。

くたびれた洋服を着ているときは、見るに見かねて、私の中古の洋服に着替えさせることがある。

彼は人一倍寡黙である。私と二人で、長時間向かい合って座っていながら、ほとんど言葉を交わすことがない。時折、一言二言発しては、ほほえんでいるだけだ。それでいて、いかにも楽しそうだった。

梅野君は、大学を出ながら、ついに、れっきとした職につくこともなく、産をなすこともなかった。ただ、一日一日、人生の至福を享受しているかのようである。その行蔵には、疑いもなく、超俗の風情があり、その心境は変通の境に達しているようである。

一橋に在学中、彼は、私と一緒に、松原にあつた賀川豊彦先生のお宅を訪ねたり、日曜には、自由が丘の矢内原忠雄先生の説教を聞きに行ったものだ。二人は、中央線の沿線に下宿していたが、世田谷の松原までは、いつも徒歩で通したものである。その道筋には、武蔵野の俵（おもかげ）が残っていた。そのころの彼も決して多弁ではなかつたが、結構、興奮して未来を語り合つたことを覚えてゐる。それが今日では、極端に寡黙になつてしまつた。いつ、どのような過程でこのようになったのか私は知らない。これまで、本人に確かめたこともないが、仮に本人にただしてみても、恐らくは、ただ笑つて答えないのではなからうか。

大賢は大愚の如く、大悟は小児の如し といわれている。梅野君が、大賢の人であるか、あるいは大悟に徹した人であるか、私にもよくわからない。ただ、小児のように邪気のない涼しい表情をもつた梅野君である。梅野君が、この拙文を読めば、何か言ってくるに違いないが、何と言ってくるか今から楽しみにしている。

眞鍋正直兄を追慕して

高松高商時代、「イエスの僕曾」で共に活動し、その後、戦病死した友人・眞鍋氏への追悼文。大平の青年時代を物語る数少ない文章の一つ。

昭和三年から五、六年頃にかけて母校に在學せし諸君は「イエスの僕曾」なる團體の果敢な活動を記憶されてゐることと思ふ。それは當時全國の大學高専を遊説されて多数の共鳴者を獲ち得た工學博士佐藤定吉氏の自然科學的宗教觀に魅了せられた一群の學生の結社で、既成のYMCAの萎靡沈滞に對する反動も手傳つて或は校庭に或は街頭にこの群獨特の活潑な動きを展開してゐた。成程初期に於ては運動の焦点の見定めがつかず綱領自體に清算さるべきものもあつたので何かしら地につかない突飛な相貌を呈してゐたかも知れない。或は當時の學生層に喰入つてゐた一般的不安をかう言つた側面から發散させようとすゝる一つのもが、ぎとして一般に受取られてゐたかも知れない。しかしともかくこの群は一つの異様なセンセーションを校の内外に捲き起し相當優秀な學生の多くを自己の陣營に迎へてゐた。そして彼等は抑へ難い内面的鬭争と清算の過程を辿つて或者は基督教の正統に導かれ或者はこれを捨てて行つた。

眞鍋君がこの群の一員、しかも熱心なメンバーであつたと言へば不思議に思ふ方があるかも知れない。然し彼と私の交友はこの群を通じて始まりこの群を組紐として繼續された。眞鍋君がこの群に投じたのは昭和三年の晩秋であつた。當時彼は高商の二年であつた。興奮した様な赫顔が集會の片隅によく見受けられた。彼は決して容易に口を割らうとはしなかつた。又私の様に得意になつてコンフエシヨンを試みやうともしなかつた。それでも大抵の集會には顔を出してゐた。しかも大抵の場合隅つこで黙つて座つてゐた。しかし私は彼の爛々たる眼光からひたむきな究眞の情熱をよみとることが出来た。

一橋に入學してからは直接に接觸する機會に乏しかつたが、休暇で帰ると私の幸町の下宿を訪ねて一泊して行くことが度々あつた。その頃彼は經濟科學の科學性に疑問を抱き毎日の攻學が無味乾燥で仕方がない。この間も深更二時間思ひ餘つて雜司ヶ谷の服部先生の門を叩いて教へを乞ふたと言ふ様な内面の苦惱を静かに洩らしてゐた。川田順氏がその愛子を戒めた歌に法律經濟などは鶉鳥うずはとりのかかづらはしき學問と思へと言ふのがある。私は六十歳近くにもなつて尚かう言ふ歌を作る人が實は嫌ひである。しかし感じ易い青年學徒がひたむきに生命の綠樹を求め人生の第一義に徹しようと力み汗はむ時、かうした科學の分野で一度は止め難い強烈な失望を感じるに至るは極めて自然なことである。一橋に於ても彼は眞理然り唯一の眞理の底を叩き出さずば納得出来ない精進の一筋道をひたばしつてゐたに違ひない。

卒業後彼は住友人となつた。何故彼が住友に一生を託する氣になつたか？。私はその理由を彼より直接聞いたことはない。しかし彼の今迄辿つて来た魂の道程は眞直に住友に通じてゐたのだと私は解釋している。私は何も住友の資金的實力を禮讚するものではない。唯住友が大資本を擁するに非れば

出来かねる立派な國家的事業のみを経営し、尚それにも増して住友が現代日本で稀にみる高潔な精神的團體であることが、實業界で身を立てんとする眞鍋君の魅力であつたに違ひない。住友ビルの薄暗い廊下で肩を並べて歩きながら、私は彼が住友人としての悦びに浸つてゐるのを祝福したい様な氣持にさへなつた。エレベーターの入口で固く握手を交はして別れたのはたしか昭和十一年の春だつたと思ふが、つい昨日の様に思はれてならない。然るにその後彼は荒涼たる大陸に執り馴れぬ銃を執つて病を得、耐へ難い忍苦の中に君國に殉じたのである。そこには遺憾ながら華々しい壮烈な戦死の有様を偲ぶことが出来ないが、驕らず飾らざる野戦病院で彼らしく肅々として逝つたことであらう。張り切つた弓弦の様な緊張を以て生き抜いた彼の「眞實」は、その本来企圖した結實をみずして娑婆に沈黙したけれども、私の如き後進の胸壁に絶えず脈打つて弛緩と妥協を警めてくれる。彼に於ける一日は實に千年の價値に値したのである。

天性の政治家 宮脇朝男君

幹事長時代に、郷里の友人・宮脇朝男全国農協中央会会長を追悼したもので、短い文章のなかに故人の人物、業績などを鮮やかに浮彫りにしている。

五月二日の午後、宮脇朝男君は波乱に富んだ多彩な六十五年の生涯を閉じた。

私は君と同郷でありながら戦前の君のことをよく知らない。私が君との交友に恵まれた時は、君はすでにおしもおされもせぬ農業界の指導者であった。

これという学歴はなかったが、君は内外にわたる豊富な知識とすぐれた見識をもっていた。その上に素晴らしい表現力とたくましい実行力を身につけていた。私などの到底及ばないスケールの大きい天性の政治家であった。

終戦直後、君は香川三区から社会党を名乗って衆議院に挑み、惜敗したことがある。それがあらぬか、いわゆる革新陣営に友人が多かった。しかしこのところ十数年は、公私にわたって私と相許す仲間となり、水魚の交わりともいうべき間柄になった。かくて君は、保革いずれの側にも傾斜することなく、農業団体の指導者としてその本分を全うした。

宮脇君の名声を一躍天下にとどろかせたのは、申すまでもなく、昭和四十二年、彼が全国農協中央会会長になってからのことである。中央会会長としての君の活躍はまことに颯爽（さつそう）たるもので、八年に及ぶ任期を通して、転換期の農政のかじとりには、卓越した指導力を発揮した。政府と与党にとって君は文字通り手ごわい相手であったが、しかしはげしい対立と抗争の真つただ中においても、君は政府与党とのパイプを閉ざすことなく、闘争の終着点を冷静に見極める余裕と洞察力を合わせもっていた。

君はまたこまやかな人情と周到な親切心をもった魅力ある人柄であった。事業や身の上の相談に当たっても、真に頼みがいのある人であった。神宮前のマンションから、早朝、よく電話をかけて来て、私の身の上にも絶えず気を配ってくれた君である。君が毎朝好んで散歩した外苑付近は、今滴るような若葉でいっぱいであるというのに、天は非情にも君を回収してしまった。噫。

（昭、五三・五・四）